

Apocrypha stay night

須賀孝太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あったかもしれない聖杯大戦。

勝つのは「黒」か「赤」かそれとも…

目次

プロローグ

聖杯戦争、万能の願いを叶えるという聖杯を巡る戦い。ここに「冬木の」という枕詞がついた場合、秘匿される神秘を守る魔術師の間では英霊をサーヴァントとして召喚し最後の一騎になるまで殺し合う極めて特殊な戦争を指す。

東方の小国として魔術協会の監視が緩かったせいだろう。この聖杯戦争は三度繰り返されるまで魔術師たちの間にも目をつけられることはなかった。だが、第二次世界大戦直前に行われた三度目の聖杯戦争、時制の影響か国家が介入する。その異常事態を機に聖杯戦争のシステムそのものが世界中の魔術師たちに情報として拡散された。魔術師たちは驚くとともに冬木の聖杯戦争の模倣を試み始めた。結果は成功。システムを知っていれば、魔術師として二流の者でも再現ができたのだ。

それほどまでに遠坂、アインツベルン、マキリの御三家が構築した聖杯戦争のシステムは儀式として優れていたのだ。だが、冬木における聖杯戦争は60年以上経った今まで一度も行われていない。

現在、冬木の聖杯戦争を模倣した亜種聖杯戦争は世界各地で行われている。しかし、その儀式で呼び出せる英霊の数は多くとも五騎。儀式を成立させたとしても万能の願望機である聖杯を出現させるに至っていない。

|||||

燃え盛る洋館の中で彼は呻き、這っていた。身体の限界はとうに超え、数十cm進むたびに激痛と血に似た何かが飛び散る。それでも死なぬのは一重に「死んでたまるものか」という執念、いや、怨念のおかげだろう。今回、行われた聖杯戦争もまた失敗に終わり、大聖杯すら失ってしまった。もう、儀式の完成は不可能だろう。

(儂は……どこに向かっておる?)

最初は願いがあった。「世界を救う」という大層な願いが、だが、今ではただ生きながらえることのみを考えるようになった。そのために自身の子孫を巻き添えにマキリは息絶えるのか？

